第13回 マルチステージの人生とSDGs

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学准教授　野田 真里

持続可能な開発と「活力ある高齢化」―世代を超えて

持続可能な開発という概念は、実はSDGsに先立つこと約四半世紀前に国連で議論されました。「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」（環境と開発に関する世界委員会、1987年）と定義され、世代を超えた課題と認識されています。前回ご説明した、世界保健機構（WHO）が提唱する「活力ある高齢化」（active aging）は、日本の地域社会はもとより、世界の持続可能な開発においても重要となります。世界の高齢化の最先端にある日本において「人生100年時代」と呼ばれる今日、「活力ある高齢化」をどのように進めていけばよいのでしょうか。

「人生100年時代」と「人づくり革命」

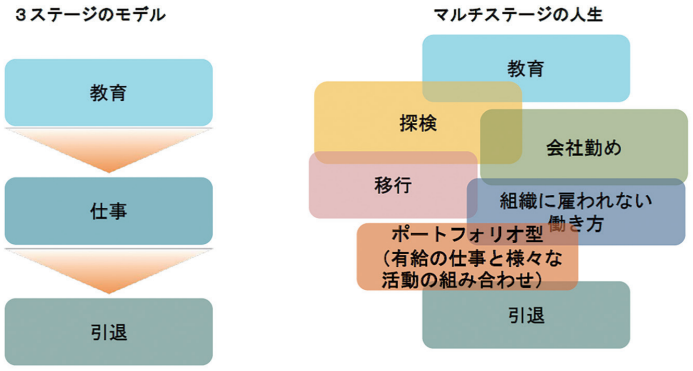
政府は2017年9月、内閣総理大臣を議長とする「人生100年時代構想会議」を設置し「人生100年時代を見据えた経済・社会システムを実現するための政策のグランドデザインに係る検討」を行い『人づくり革命 基本構想』（2020年6月）をまとめました。基本的考えとして「人生100年時代には、高齢者から若者まで、全ての国民に活躍の場があり、全ての人が元気に活躍し続けられる社会、安心して暮らすことのできる社会をつくる」必要がある、とされています。そのために「人づくり革命」、人材への投資が必要であるとし、重点分野として「人生の再設計が可能となる社会」とこれに向けた「何歳になっても学び直し、職場復帰、転職が可能となるリカレント教育」、「意欲ある高齢者に働く場を準備」等を挙げています。

人生モデルの転換 ― 3ステージからマルチステージへ

この「人づくり革命」の考え方は「活力ある高齢化」つまり「人々が歳を重ねても生活の質が向上するように、健康、参加、安全の機会を最適化するプロセス」と親和性が高いといえます。ここで鍵となるのが、ロンドンビジネススクールのリンダ・グラットン教授が提唱する、人生モデルの転換です（図）。旧来の固定化された「3ステージ人生」においては、人々は一斉に一定の年齢になると同じ人生のステージを歩みます。つまり、一定の年齢で就学し、卒業後に就業、そして退職・引退となります。こうした硬直的な人生モデルは、減少する生産年齢人口（15-65歳）に対して、高齢者（65歳以上）が増えていく少子高齢化の中では、持続可能とは言えません。ライフスタイルの多様化という時代の要請にも合致せず「人生100年時代」に求められる高齢者人生の再設計や意欲ある高齢者の就労は困難です。

そこで「マルチステージの人生」への転換が必要になります。マルチステージとは、人生において、柔軟で多様な段階があることを意味します。つまり、年齢に関係なく、人々が自由に人生を設計し、いつでも教育を受け、会社勤めや自営等での就労ができることです。また仕事に加えて、さまざまな活動（地域社会の活動等）を行えることです。こうした人々の人生を豊かにしていく多様な営みや、それを可能とする社会をつくることが、SDGsにおいて重要といえるでしょう。

図：3ステージのモデルからマルチステージの人生への転換



出典：グラットン、L.(2017)

【問い合わせ】
政策秘書課（麻生庁舎）
☎0299-72-0811
Mail:seisaku01@city.namegata.lg.jp